市立函館博物館館報サラニップ

SARANIP

No.48 2009.3.31

クリルアイヌの十字架

十字架(資料番号:民族1051)

1878年シュムシュ島のクリルアイヌ
(市立函館博物館所蔵)

大きさ3.5cm×1.8cmで銅製のロシア正教式十字架で、首から下げるための紐を通す環が上部に付けられています。また、資料表面上部には「地上の王」、中央両端には「イイススハリストス」、下部には「髑髏(どくろ)のあるところ」が刻まれ、裏面には「神は起き其仇は散るべし」を意味するロシア語が刻まれています。

この資料は、函館を代表する考古・民族学者馬場脩(1892-1979)が1937年7月に千島シュムシュ島アレキサンドル丘上の集落跡で行った発掘調査の際に発見されました。この資料が出土したシュムシュ島別飛第3号竪穴は馬場脩による千島の編年の「末期」(19世紀前半頃)にあたり、ロシア文化の影響が色濃く見られる時期に形成されたもので、ロシア製鉄斧や西洋陶器等が共伴して出土しています。

この時期にシュムシュ島に居住していたクリルアイヌは、ラッコの毛皮を求めてカムチャツカ半島経由で入ってきたロシア人により、物質文化および精神文化の両面において強い影響を受けていました。当時のクリルアイヌの様子を描いた民族誌からは、シュムシュ島にロシア正教の教会が建てられていたことや、生まれた子供に司祭が洗礼を施してロシア式の名前が付けられていたことをうかがい知ることが出来ます。

シュムシュ島別飛第3号竪穴
(馬場脩1938「北千島占守島及び樺太多来加地方における考古学的調査予報」より)

馬場脩は1933年から1938年にかけて千島シュムシュ島およびパラムシル島で発掘調査を行っており、その成果の大部分は馬場コレクションの一部として市立函館博物館に寄贈され、現在は函館市北方民族資料館において収蔵・展示されています。また、馬場脩自身ハリステニアンであったこともあり、教会を通じて手に入れたクリルアイヌ関連の民具資料も、国指定重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」の一部として同館において収蔵・展示されています。

大矢　京右

平成20年度特別企画展報告１

函館繁盛記－街を支えたモノツクリ－

平成20年５月27日から７月６日まで、博物館本館の第１展示室で特別企画展「函館繁盛記－街を支えたモノツクリ－」を開催し1,773名の方にご覧頂きました。

平成16年の合併以来、亀田半島のほぼ全域が函館市となりました。函館と合併した戸井・恵山・椴法華・南茅部は、かつて松前藩の時代には「箱館六箇場所」（小安・戸井・尻岸内・尾札部・茅部・野田追）とよばれた一つの地域でした。六箇場所はコンブ・ニシン・サケ・タラ・イワシなどを産出し、箱館はその集積地として成長します。箱館に集められ出荷された『煎海鼠・干(串)鮑・昆布』などの水産加工品は、当時、長崎俵物として知られた函館ブランドの代表でした。それからおよそ150年をへて、ふたたび５つの地域が協力して新しいまちづくりが進んでいます。

幕末には幕府の直轄地となり、明治から昭和にかけては北洋漁業と関連する産業の恩恵により独自の発展を遂げ、商業地として発展する一方で函館を支えたもう一つの顔が、やはり津軽海峡や内浦湾を取り巻く漁業や海産物の加工業に従事する人々でした。

大正2･3年頃の戸井のマグロ漁

今回の特別企画展では、船造り、網造り、缶詰機械などのさまざまなモノツクリの職人、イワシやマグロ漁、物資を運んで地域をつないだ駄載、お土産やブランドつくりには欠かせない缶詰ラベルなど時代の流れによってさまざまに変遷したこの街と地域を支えた産業に焦点をあて、あたらしい函館の素顔と各地域間のかかわりについて展示・紹介いたしました。

佐藤　智雄

平成20年度特別展報告

没後100年榎本武揚－箱館戦争の光と影－

本年は、函館にゆかりの深い榎本武揚公が明治41年に東京向島で病没してから百年目にあたります。これを記念して、平成20年７月19日から８月31日まで、博物館本館の第１、第２展示室を会場に、「没後100年榎本武揚－箱館戦争の光と影－」を開催致しました。今回の特別展では、とかく箱館戦争に限られる事の多かった武揚公の事跡を、函館との関わりを踏まえ、その生涯と近代日本の中で位置づけました。

明治政府の中でただ一人、幕臣出身の閣僚となった武揚公が羨望と非難の中で目指したものはいったい何だったのでしょう。武揚公の目に映っていたのは留学したヨーロッパと比べた祖国の貧しさでした。国土も狭く、資源に乏しい日本が世界の中で生き残って行くためには、教育による「人創り」と新たな「開拓」の種をまくことでした。その精神と行動力は、時を超えた現代にも通じます。

この特別展では、留学後に揮毫したであろうオランダ語の書や箱館に出奔する際に勝海舟らに宛てた書簡、武揚公が在箱時に着用していた軍服や箱館戦争で旧幕府海軍と共に箱館に持ち込まれたディニエ印字通信機。閣僚となってからも折にふれ函館を訪れ柳川宅に宿泊した事がしたためられた書簡や、晩年に研究・作刀させた流星刀など、函館にゆかりの深い資料を展示し、さまざまな困難の中、この国に近代国家としてのあり方を指し示した武揚公の生涯と函館の果たした役割をたどりました。

佐藤　智雄

榎本武揚書状（高幡山金剛寺所蔵）

ディニェ印字通信機（逓信総合博物館所蔵）

平成20年度特別企画展報告２

国宝中空土偶と函館発掘物語

中空土偶を背景に西尾正範市長から市長賞の授与

一日平均230人以上が詰めかけた展示会場

今年度の特別企画展「国宝中空土偶と函館発掘物語」は、９月９日から９月23日までの15日間にわたって本館第１展示室を開場に無休で開催し、有料･無料あわせて3,750名の方々にご観覧いただきました。

同特別企画展では、1975年に旧南茅部町で出土し2007年に国宝に指定された中空土偶を中心に、明治期の「日本考古学のあけぼのと函館」、大正・昭和前期の「函館考古学の発展」、昭和後期の「高度経済成長と発掘調査の広がり」、平成の「市民が作る『函館発掘物語』」の４コーナーで構成し、函館における考古学の歴史を紹介しました。サイベ沢遺跡出土土器や函館空港遺跡群出土遺物などの各期を象徴する考古資料はもちろん、縄文文化交流センター建設構想や大船遺跡の世界遺産指定への動きなど函館の考古学に関わる最新のトピックも展示・解説し、多くの観覧者から好評を賜りました。

また、開催初日には中空土偶の発見者である小板アヱさんに西尾正範函館市長から市長賞が授与されて華々しいオープニングを飾り、会期中も学芸員による展示解説や遺跡発掘体験などの小学生向けのワークショップが開催されるなど、大変充実した展覧会となりました。

大矢　京右

平成20年度企画展報告

アイヌ語地名を歩く－山田秀三の地名研究から－

2008・渡島/檜山/津軽海峡

今年度の企画展「アイヌ語地名を歩く－山田秀三の地名研究から－2008・渡島/檜山/津軽海峡」は10月９日から11月16日までの39日間（実開催日数32日間）にわたって本館第１展示室で開催し、期間中有料・無料あわせて1,519名の方々にご観覧いただきました。

同企画展は、アイヌ語地名研究で知られる故･山田秀三氏の遺族から北海道立アイヌ民族文化研究センターに寄贈された同氏の研究資料「山田秀三文庫」の公開の一環として、同センターとの共催事業として開催されました。山田秀三氏の経歴や研究方法に関わる展示をはじめ、これまで道内各地（平成16年度：札幌，平成17年度：旭川，平成18年度：釧路，平成19年度：苫小牧・室蘭・伊達）で開催された同企画展の最終開催地として、渡島・檜山・津軽海峡沿岸地域に関わる山田秀三氏の研究資料（地図・写真など）を展示・解説しました。

また、同企画展に関連してミニパネル展示（10/7～10/18：函館市中央図書館）や山田秀三文庫の地名研究資料についての講演会(10/11・10/18：函館市中央図書館)、展示解説セミナー(10/12：博物館本館)、バスツアー「アイヌ語地名めぐりの旅」(10/19：函館～白老)など多くの事業が開催され、道内に限らず青森県など東北地方にお住まいの方々も多く参加されました。

大矢　京右

左：北海道立アイヌ民族文化研究センター小川正人研究員による展示解説

右：「アイヌ語地名めぐりの旅」アイヌ民族博物館からの帰途、室蘭市地球岬で記念に１枚

平成20年度美術常設展より

今年度の美術常設展は、「和の空間」、「はこだて漫遊記交遊記」、「美の競演」、「ハッピーコレクション」の４本です。「和の空間」は和にこだわり、掛け軸や襖、屏風に表装した書画、刀と鐔で構成しました。光忠・虎徹・堀井俊秀の３振りの刀を時間をかけて眺める観覧者の姿を時折見かけ、刀の人気は根強いと感じました。「はこだて漫遊記交遊記」は特別企画展「函館繁盛記」の番外編で、北海道南部の美術の活動華やかなりし頃を想定し、蠣崎波響とその弟子たち、明治の書画会という２つの時代の作品を紹介しました。新たな試みとして、作品と描かれた鳥の剥製を並べてみたところ、鳥が絵画という平面を飛び出し、立体的な展示となったと好評でした。

「美の競演」は新収蔵資料から1920年代に函館に生まれた二人の画家、鎌田俳捺子、岩田治子の作品を紹介しました。抽象と写実と、対照的な作風ながら、根底に流れる力強さは共通し、ひとつの空間で見応えのある展示になりました。

蠣崎波響「春雨桜雉図」とニホンキジ剥製

右から「一富士二鷹三茄子」のコーナー

「ハッピーコレクション」では、年末から春にかけて心が温かくなるように、美術という枠を越え、縁起の良い物を集めました。七福神や福助、お多福、鶴亀、初夢にちなんで「一富士二鷹三茄子」などの絵や引き札、人形、三平皿を揃え、お正月遊びのかるたや双六も紹介し、これはめでたい！と大評判でした。

霜村　紀子

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲ 平成21年度展覧会　開催予報 ▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

中空土偶展 国宝中空土偶と函館の文化財

国宝に指定された平成19年から毎年特別展や特別企画展において中空土偶を公開してきましたが、ご好評にお応えして平成21年度も期間限定で公開いたします。

今回は中空土偶が「考古資料」であると同時に、「文化財」であるとの視点に立って、函館にある国指定重要文化財や北海道指定文化財・函館市指定文化財とともに展示する予定です。また、中空土偶に関する新情報（CTスキャンによる中空土偶の輪切り画像やCGによる中空土偶の内部画像など）も紹介する予定ですので、是非ご期待下さい。【平成21年4月25日（土）～5月17日（日）開催予定】

大矢　京右

函館開港150周年記念

特別企画展 アイヌの美-カムイと創造する世界-
ロシア民族学博物館・オムスク造形美術館所蔵資料

ロシア民族学博物館（REM）は樺太・北海道アイヌ資料約2,600点を収蔵しています。REMコレクション展の第２弾となる今回は、函館、北海道ゆかりのアイヌ生活用具約２２０点の逸品を選りすぐり、さらに、オムスク造形美術館収蔵の、幕末から明治初期にかけて函館でアイヌ風俗画を描き活躍した平沢屏山の作品12点を紹介します。これらは本邦初公開の里帰り資料で、今後二度と見られない貴重な資料です。当時のロシアにおける異文化～のまなざしを通して、アイヌ文化に対する理解を深める絶好の機会と言えます。シンポジウムやコンサートもありますので、どうぞお楽しみに。

【平成21年７月18日（土）～9月6日（日）開催予定】

霜村　紀子

特別展 みなと　HAKODADI　ハイカラ展

安政５（1858）年に諸外国と通商条約が締結され、翌年から箱館は貿易港となりました。今年は箱館が貿易港として開港してから150年を迎えます。このことを記念して特別展では、開港前から開港を経て近代都市へと変遷していく函館の姿を港に焦点を当て紹介していきます。

展示では、松前三湊の一つとして賑わっていた箱館の様子やペリー来航と開港後の港の様子、東京以北最大の都市となっていく函館の街の変遷、昭和９年の大火からの復興と開港77周年を記念して開催された港まつりなどを取り上げる予定です。

【平成21年９月19日（土）～10月25日（日）開催予定】

保科　智治

HAKODATE PORT 150TH ANNIVERSARY

平成20年度博物館講座報告
バスツアー「親子で行く今金・太古の旅」

寺崎学芸員の講義を受ける参加者

今年度で５回目(平成18年度を除く)を数える『親子で行く今金・太古の旅』を、今年は悪天候の中、10名の参加者により8月3日(日)に実施しました。最初に今金町金原貝類化石層で、寺崎康史学芸員による、現地の状況説明と貝化石の採集でした。降雨のため、短時間の作業でしたが、参加者は、やや大形の巻き貝類やアラスカニシキガイの大形のものを採集できました。寺崎学芸員も「これは珍しい」と参加者に声をかけていました。その後豊田ふれあい交流館に移動し、寺崎学芸員による貝化石の採集方法とクリーニング、さらに同定についての講義となり、また、ピリカカイギュウの発見から発掘、整理、保存、複製の作製、展示までの解説を行いました。

続いて、宮本雅通学芸員の先導で花石物産館に移動し、ピリカカイギュウの骨格標本(複製)や自然遺物である貝類の説明を受けました。

次に、ピリカ旧石器文化館に移動し、その敷地内にある収蔵庫にて、企画展「昭和の回顧展」の見学と、今回特別にピリカカイギュウの現物標本を見学しました。ピリカカイギュウの現物は当初予定になかったので、参加者一同、感激の様子でした。

最後に、文化館に移動し、旧石器遺物の説明を受け、さらに敷地内に遺跡発掘現場を遺物とともに再現した施設内での説明を受け、記念撮影をして、今金での全日程を終了しました。　　佐藤　理夫

ピリカカイギュウの骨格標本を見学する参加者

平成20年度博物館講座開催実績

【通年講座(ワークショップ)】

No.	講座名	開催期日	参加者数
1	自然観察入門講座(年12回)	4月20日(日) -3月8日(日)	14
2	四季の星空観測講座(年５回)	5月9日(金)- 1月23日(金)	14

【単独講座】

No.	講座名	開催期日	参加者数
1	宇宙と天体シリーズ 「春の星座を見てみよう」	5月９日(金)	17
2	展示解説セミナー 特別企画展「函館繁盛記」	5月31日(土)	20
3	身近な自然を調べる「浜辺の漂着物を調べてアート体験しよう」(水産・海洋体験プログラム)	6月15日(日)	12
4	展示解説セミナー 特別展「没後100年榎本武揚」	7月19日(土)	49
5	宇宙と天体シリーズ 「夏の星座を見てみよう」	7月25日(金)	20
6	親子で作る「ペタペタアート」	7月26日(土)	18
7	夏休み自由研究「縄文体験―動物の骨で〈釣り針〉を作ろう」	7月29日(火)	17
8	夏休み考古学講座 「勾玉作り」	7月30日(水)	20
9	わくわく科学教室 「ドライアイスで遊ぼう」	7月31日(木)	24
10	バスツアー 「親子で行く今金・太古の旅」	8月３日(日)	10
11	夏休み自由研究「鉄道車両の仕組みとJR見学会」	8月５日(火)	31
12	夏休み考古学講座 「土器づくり」	8月６日(水)	20
13	夏休み自由研究 「昔の道具を調べよう」	8月７日(木)	10
14	夏休み自由研究 「今よみがえるディニェ印字通信機」	8月９日(土)	12
15	わくわく科学教室 「シリカゲルを科学する」	8月10日(日)	12
16	宇宙と天体シリーズ 「宇宙と人間」	8月23日(土) 8月24日(日)	4
17	夏休み考古学講座 「遺跡発掘体験」	9月13日(土)	6
18	講演会「山田秀三と地名研究資料について」1	10月11日(土)	80
19	展示解説セミナー「山田秀三文庫の地名調査資料について」	10月12日(日)	55
20	講演会「山田秀三と地名研究資料について」2	10月18日(土)	92
21	バスツアー 「アイヌ語地名めぐりの旅」	10月19日(日)	27
22	わくわく科学教室「イカを科学する」(水産・海洋体験プログラム)	11月１日(土)	8
23	冬休み自由研究 「蓄音機を鳴らしてみよう」	１月６日(火)	11
24	冬休み自由研究 「手作りおもちゃで遊ぼう」1	１月８日(木)	31
25	冬休み自由研究 「さし絵に挑戦」	１月９日(金)	36
26	冬休み自由研究 「手作りおもちゃで遊ぼう」2	１月９日(金)	13
27	わくわく科学教室 「もしも原子が見えたなら」	１月15日(木)	15

平成２０年度をふりかえって…

館長　長谷部　一弘

「箱館戦争が知りたくて東京から来ました!」暑い夏の日の博物館での一コマです。

函館山の麓、市民の憩いの場「函館公園」に佇む函館博物館は、遅い北国の桜の季節を迎える５月から修学旅行、観光シーズン、夏休みを経て紅葉に染まる11月にかけ、特別展１回、特別企画展２回、企画展２回の展覧会を開催し、多くの子ども達や市民、観光客で賑わいました。とりわけ特別展「没後100年榎本武揚」、特別企画展「函館繁盛記」、「国宝中空土偶と函館発掘物語」は、函館の地域的、歴史的特性をテーマとした函館ならではの企画と好評をいただきました。展覧会を通して、これまで地域にこだわり、地域に根ざした資料の収集や調査・研究等の成果がまたひとつ多くの観覧者の心を捉えることが出来たものと思います。

また、博物館活動の目玉のひとつでもある博物館講座は、通年講座、単独講座あわせて29の講座が開催されました。毎年、大人気の青少年を対象にした夏休み、冬休みの体験型の講座をメインとする中で、企画展「アイヌ語地名を歩く」の関連事業として開催された講演会や展示解説セミナーは、展覧会とあわせ心待ちにしていた大勢のアイヌ語地名、アイヌ文化ファンを釘付けにし、近年にない盛況のうちに終えることが出来ました。

100年に一度の金融危機とまで言われる世界規模の厳しい現況にあって、地道に歩んできた日頃の資料収集、保存・管理、調査・研究、普及活動をベースに、社会の一翼を担う博物館活動を前向きに有言実行できたことは幸いです。「継続は力なり」、次年度も「函館博物館」にご期待ください。

平成20年度新収蔵資料紹介

ここに掲載している新収蔵資料は、平成20年４月1日から平成21年２月14日までに受け入れたものです。

○寄贈資料

・片上楽天関係資料　13件19点
［七飯町・片上　耕 氏 寄贈］
・在外同胞救出学生同盟腕章他　２件３点
［東京都・小森　良彦 氏 寄贈］
・トイレ用手洗器他　８件11点
［函館市・木村　正蔵 氏 寄贈］
・半纏他　３件31点
［函館市・三井　大樹 氏 寄贈］
・能登川コレクション関係資料　５件13点
［新潟県・深野せき子 氏 寄贈］
・ルリビタキ他　15件15点
［北斗市・佐藤　理夫 氏 寄贈］
・小島倉太郎関係資料　６件66点
［神奈川県・小島　敏夫 氏 寄贈］

博物館機構・職員構成

■市立函館博物館本館

〒040-0044 函館市青柳町17－１
Tel.0138-23-5480　Fax.0138-23-0831
hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp

館　　長　長谷部一弘
管理主査　中井　正房
　　富永　隆一
　　谷　智恵子
　　佐藤　恒一
学芸主査　佐藤　理夫（自然）
学 芸 員　佐藤　智雄（歴史・民俗）
学 芸 員　保科　智治（歴史・民俗）
学 芸 員　霜村　紀子（美術）
学 芸 員　大矢　京右（考古・民族）
　　山本　泰子

◇函館の歴史や自然、生活道具、函館周辺の考古資料、美術資料を展示

■市立函館博物館郷土資料館（旧金森洋物店）

〒040-0053 函館市末広町19－15
Tel&Fax.0138-23-3095

◇金森洋物店、明治・大正期の生活道具を展示
詳しい資料の問合せは本館まで

－誌名ＳＡＲＡＮＩＰ（サラニップ）について－
アイヌ語：シナの樹皮で編んだ袋。
博物館情報や研究成果などをＳＡＲＡＮＩＰに入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっていくようにと命名したものです。

ＳＡＲＡＮＩＰ－サラニップ－No.48　2009.3.31発行
編集・発行　市立函館博物館
〒040-0044
函館市青柳町17－１（函館公園内）
Tel.0138-23-5480　Fax.0138-23-0831